

【銅賞】

氏名 = 林 祥代（各務原市）

書名 = 永遠の0

著者名 = 百田 尚樹

題名 = 戦争の生死

「私は死にたくない」

戦時中ほとんどの人が思っている口にしなかった言葉だ。言わないことが暗黙の了解。その代わりに「お国のため」という言葉で一丸となり戦争に挑んだと思っていた。しかし、それは私個人の見解であることを「永遠の0」を読んで初めて知った。

『特別攻撃に志願する者は前へ。』この命令に少なくとも私は、自分の命を国に捧げようとは思わない。と言っても戦争体験をしたことがないからだ。対して、この命令を受けたのが戦時中の軍人だったなら進んで命を捧げるのだらうと思っていた。彼らは、国のためにと、勇敢に立ち向かう印象が強かったからだ。しかし、作中の特攻隊に選ばれた者達の心の葛藤を読み、この人達も死を恐れたことを知ったのだ。そして残る者達のため、死に怯える姿を見せぬようにする心の在り方はとても強く映った。私は今まで命を軽く見ていた節がある。これからは自分で自分を傷つけるような生き方は止め、自分と自分の大切なものを守っていく生き方をしたいと思った。

主人公のもう一人の祖父、宮部久蔵は『臆病者』と呼ばれた。宮部は凄腕パイロットにも関わらず、戦いでは逃げてばかりだ。宮部の『生きて帰りたい』理由が『妻のために死にたくない』という意志の延長上だと判明した時、私は素晴らしい思いだと胸を打たれた。現代の所謂「愛している」を吐露できるほど妻を深く愛することは簡単ではない。個人よりも国のためという考え方が主流だった軍の中で、なぜそこまで妻を思うことができたのか。私は周りに合わせて目立たないようにすることが多くある。対して宮部は目立つことを厭わず自分の意志を貫いている。ところが最後に宮部は死を選ぶのだ。ここで私のなぜ今まで生きることにこだわっていたのに死んだのかという疑問が膨れ上がった。宮部が生死を分ける飛行機を交代する前に、直掩機を務めた特攻隊が全滅、宮部だけが帰還したことがあった。この時に宮部は、彼らの死を仕方ないという言葉で終わらせられないと激昂する。それ以来、笑顔は消え、頬は痩せこけ、眼が異様にギラつくという変化が現れる。特攻隊を絶滅させたという罪悪感が宮部という人間を壊してしまったのだと思う。宮部の優しすぎる人間性は戦争によって失われてしまうのだ。そして、戦争の哀れな被害者であったことが悲しいほど伝わってくる。

戦争は、命をたやすく奪い、哀しさと惨さしか遺さない。加えて、日本内の生き証人は減っている。戦争とは程遠い生活ができている今だからこそ昔を見直し、戦争を用いず日本が他国との友好を深め、発展していくことを心から願う。